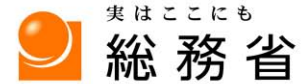


報道資料



MIC Ministry of Internal Affairs  
and Communications

平成23年10月21日  
消 防 庁

## 平成23年夏期（7月～9月）の熱中症による救急搬送の状況

消防庁では、夏期（7月～9月）の熱中症による全国の救急搬送状況について取りまとめましたので、その概要を公表します。

### 【資料】

- ・ [平成23年夏期（7月～9月）の熱中症による救急搬送状況](#)
- ・ [平成23年9月の熱中症による救急搬送状況](#)

（上記資料は、消防庁ホームページに掲載します。）



（連絡先）  
消防庁救急企画室  
担当：長谷川・伊藤・渡邊（俊）  
電 話：03-5253-7529  
FAX：03-5253-7539

# 平成23年夏期(7月~9月)の熱中症による救急搬送状況の概要 (「夏期(7月~9月)」を以下、「夏期」という。)

平成23年夏期の救急搬送状況について取りまとめたところ、その概要は以下のとおりでした。

## 1 背景

平成23年夏期の天候は、夏の平均気温は全国的に高く、各地域でかなり高い時期がありました。7月上・中旬は北・東日本で気温が平年を大幅に上回り、7月中旬、8月中旬を中心に多くの地点で猛暑日となりました。北日本から西日本では7・8月下旬など、沖縄・奄美では8月上旬などに太平洋高気圧が弱まって気温が平年を下回る時期もあり、太平洋高気圧の勢力の変動に対応して気温の変動が全国的に大きくなりました。

9月のはじめは、台風12号や前線の影響により、北日本から西日本にかけて曇りや雨の日が続き、紀伊半島を中心に記録的な大雨となりました。その後、月の中頃にかけて、東・西日本では厳しい残暑となりました。月の中頃から下旬はじめにかけては、台風15号の影響によって、沖縄・奄美と西日本で曇りや雨の日が多くなり、その後台風15号は東海地方に上陸し、西日本から北日本の広い範囲で記録的な大雨や暴風となりました。月の終わりは、北日本から西日本にかけて晴れた日が多くなりましたが、寒気の影響により全国的に気温が平年を下回る日が多くなりました。

## 2 ポイント

- ・ 平成23年夏期の全国における熱中症による救急搬送人員は39,489人でした。これは、平成22年夏期の熱中症による救急搬送人員53,843人の0.73倍、平成21年夏期の熱中症による救急搬送人員12,971人の3.0倍となっています。
- ・ 救急搬送人員の年齢区分をみると、高齢者(65歳以上)が17,432人(44.1%)と最も多く、次いで成人(18歳以上65歳未満)16,136人(40.9%)、少年(7歳以上18歳未満)5,555人(14.1%)、乳幼児(生後28日以上7歳未満)366人(0.9%)の順となっています。
- ・ 医療機関での初診時における傷病程度をみると、軽症が最も多く24,887人(63.0%)、次いで中等症12,739人(32.3%)、重症906人(2.3%)の順となっています。また、死亡は59人(0.1%)で、平成22年(167人)と比較し大幅に減少しました。
- ・ 都道府県別の救急搬送人員は、東京都が最も多く3,418人で、次いで埼玉県2,907人、愛知県2,596人となっており、大都市を含む都府県が多くなっています。また、平成22年と比較すると、全都道府県において搬送人員は減少しています。  
一方、都道府県別人口10万人当たりの救急搬送人員についてみると、群馬県が最多で48.27人、次いで鳥取県47.61人、新潟県43.35人、埼玉県41.21人、岡山県40.72人となっています。
- ・ 気温と熱中症傷病者搬送人員は相関し、気温(平均気温及び日最高気温平均)が上昇すると搬送人員も増加する傾向にあります。

### 3 その他

- ・ 熱中症を予防するには、暑さを避け、こまめに水分を補給し、急に暑くなる日には注意することなどが必要です。また、高齢者は温度に対する皮膚の感受性が低下し、暑さを自覚できにくくなるので、屋内においても熱中症になることがありますので注意が必要です。
- ・ 政府では、国民へ熱中症に対する注意を呼びかけるとともに、下記のHPで熱中症の情報を提供しています。

環境省熱中症情報 [http://www.env.go.jp/chemi/heat\\_stroke/](http://www.env.go.jp/chemi/heat_stroke/)